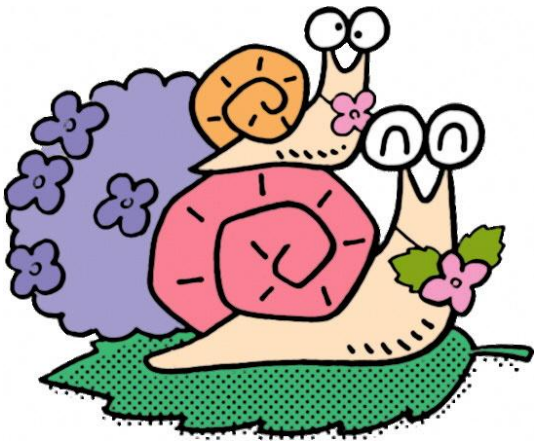
小児科だより vol.10

ビタミン K_2 シロップとは

2017.6.1 発行



こんにちは。この度、当科でも１カ月健診を始めさせていただく運びとなりました。出産を終えたお母さんたちは、産院退院後から生後１－２カ月の間に育児に対する不安が最も強くなるといわれます。出来る限り育児不安を軽減し、育児を楽しめるように支援出来ればと考えております。今回の小児科だよりは、産婦人科入院中や１カ月健診の際に内服するビタミン K_2 シロップに関するお話です。

生体内でビタミン K（以下 VK）が欠乏すると、血液凝固反応の進行に支障をきたし、その結果出血を起こします。通常成人においては、抗凝固薬を内服しているなどの特殊な状況を除けば、VK が欠乏することは極めて稀ですが、新生児・乳児は比較的容易に VK 欠乏に陥ります。生まれながらにして貯蔵量が少ないことや、その供給が哺乳に依存しており、また VK の吸収能や再利用率が低いことも関係しています。皮膚出血や消化管出血以外に頭蓋内出血を起こすことがあり、出血部位により死亡や後遺症を残すなど、予後不良な転帰をたどることがあります。

日本では第１回全国調査が 1981 年に行われ（調査期間 1978 年１月～1980 年 12 月）、新生児 VK 欠乏性出血症は出生 290 例に１例（約 0.35%）、乳児 VK 欠乏性出血症は出生 4000 例に１例（約 0.025%）でした。1984 年にビタミン K_2 シロップの市販が開始された後、投与法については変遷を経て 1989 年に現在も行われている生後 3 回投与法が推奨されました。その後、第 5 回調査（1999 年１月～2004 年 12 月）での乳児 VK 欠乏性出血症の頻度は 10 万例に 0.4 まで減少しました。しかし予防投与が行われていても、依然として VK 欠乏性出血症を発症することが明らかとなり、2011 年に新たなガイドラインが提唱されました。

改訂されたガイドラインでは、これまで推奨されてきた生後 3 回投与に加えて、生後 3 か月までの週１回投与（計 13 回内服）も選択肢の一つとなりました。この改訂を受けて、すでに山口県など一部の都道府県では全県でビタミン K_2 シロップの週１回投与が導入されています。背景として元々山口県では、１カ月健診を公費負担で小児科医が勤務している病院または診療所で行っていることなどが挙げられます。保護者が直接内服させることや飲ませ忘れ、吐いた時の対応なども含めて様々な議論がありますので、今後山口県などの取り組みが全国に広がるか注視し、当科でも対応していく予定です。